

# 大学生の文章に見る問題点の分類と 文章表現能力の指標づくりの試み

大島 弥生

(東京海洋大学 海洋科学部)

## 1. 問題の背景

大学生の「書く力」をめぐって、近年、新たな実践の試みが相次いで発表されている。その中で特徴的な流れとしては、書くことを通じて問題を切り出して考察する中でのクリティカルな思考力を高めようとする試み(井下 2008, 大島 2005, 鈴木 2009 ほか)、文章力の土台となる語彙力・漢字力に焦点を当てた試み(小野 2004 ほか)がある。しかし、実際の授業の過程では、個々の学生にレベルの異なる問題が複合して現れ、クラス単位の指導では個々の学生の問題に対応に難しさが生じる。本発表では、初年次の日本語表現法クラスで学生が書いた文章を題材に、大学生の文章に頻出する問題点を分類し、その傾向と対応策を考え、指導上の対応を選択するための指標の土台づくりについて考察する。

## 2. 学生の文章の特徴の分類

初年次の日本語表現法クラスで書いた学生のレポートを観察したところ、推敲作業を経たにもかかわらず、下記の表 1 に示したような問題が見受けられた。

表 1. 大学生 1 年生の文章に特徴的な問題の分類

文章の問題の分類	内容・原因・背景	例(一部改)と意識「 」
<b>A 語彙力(語彙・表記)</b> 1. 語選択の誤用 2. 語の位相の不適切さ 3. 文語表現の不適切さ 4. 漢字力の不足 5. 表記のルール違反	語の意味の不確かさ 話し言葉の混在 慣れない表現の誤用 漢字の当て字・変換ミス 記号や半角表記の誤り	元に戻る <i>現状</i> / 共通 <i>意識</i> を それなのに / こういうわけで …を導入しないべきか 資料の <i>出展</i> / 以外に多い… 1、はじめに / 1998 年
<b>B 構文力(統語レベル)</b> 1. 主述・呼応のねじれ 2. 修飾関係の不明瞭さ 3. 項・要素の不足 4. 名詞句化の不適切さ 5. 不必要に長い文 6. 読点のルール違反	述語, 副詞の呼応の乱れ 複数語の修飾の際の誤用 自分にわかれば省略? 名詞句の並列の誤用 100 字を超える文の多用 多すぎ / 少なすぎ	米が無駄にならないために …たりそれを…する鳥や魚 …を導入して…を目指し… …の減少, …が変わること …があり問題になっている
<b>C 構成力(文章談話レベル)</b> 1. パラグラフの不備 ① 話題の混在 ② 主張と根拠の不備	主張の絞込みと表裏一体 情報利用する意識の不足 主張が絞りきれしていない 主張のみ, 説明のみ	「とりあえず関係がありそう なことを書いておく」 やはり…する必要がある

③ 中心文の不備	調べた情報をただ書く	
2. メタ言語の不使用	談話標識がなく情報羅列	
D 構築力 (内容・情報)		
1. 引用の不適切さ	無知・故意による剽窃	「参考文献に載せればよい」
2. 情報検索の不足	キーワードの乏しさ	「調べたけれどありません」
3. 問いの切り出しの不足	問題意識と表裏一体	「シロクマがかわいそう」
4. 考察・検証の不足	決まり文句的な切り上げ	そうなる前に努力するべき…
E 公的伝達としての問題	読み手非配慮・点検不足	「提出さえすればよい」

これらの問題は、A1 や B1～4 のような言語能力に由来すると考えられるものだけでなく、A4～5 のような見直しの不十分さに由来するもの、A3 や C2 のような長い文章や公的な文章を書く経験の乏しさに由来するもの、D のような問題意識とそれを追及しようとする経験の有無に由来するもの、というように、それぞれ異なる背景があると思われる。また、E のような当該文章に課された責任の認識という、レベルの異なる問題もある。

とはいえ、これらを練習問題のように切り取って訓練するだけでは、実際にテーマの絞込みや情報検索に立ち向かいながら多くの情報を編集しなおして文章を作成する作業での困難を乗り越えるには不十分であろう。そこで、実際の文章作成のプロセスにおいて、その段階で必要な要素を、簡単なものから複雑なものへと並べて示し、その上で自分の（あるいは仲間の）文章を点検する、という作業を繰り返すことが必要になる。

学生の文章を観察したところ、上記の問題の中には、同一の書き手が同様の問題（主述・呼応のねじれ、項・要素の不足、読点のルール違反などが多い）を繰り返すケースが見られた。これらのケースの中には、D の内容の構築の面では優れていても、B の構文上の問題には気づいていない者もあった。また、A の 1, 2 のような語彙力に問題の多い場合は、D の問題の掘り下げにも苦戦しているケースが多く、読書量や文字情報に触れる頻度と語彙力とが関連している可能性もうかがえた。

### 3. 学生の気づきを促す工夫

もとより、このような問題点を書き手である学生自身が気づき、自ら修正できるようにならなければ、日本語表現能力が高まったとはいえない。すでに行っている方策としては、学生同士の相互点検表の試み、お互いのレポートの読み手・発表の聞き手からのコメントへの評価の試みがある。これらに加えて、個々の学生に適したアプローチを可能にすることを目指して、問題の分布をさらに指標化していきたい。

#### <参考文献>

- 井下千以子 (2008) 『大学における書く力考える力—認知心理学の知見をもとに』 東信堂  
 大島弥生 (2005) 「大学初年次の言語表現科目における協働の可能性—チーム・ティーチングとピア・レスポンスを取り入れたコースの試み—」, 『大学教育学会誌』, 27(1), 158-165  
 小野博 (2004) 「大学生の学力低下問題と理科教育：日本語力テストの開発と日本人大学生を対象とした日本語学習」 『大学の物理教育』, 10(2), 81-84  
 鈴木宏昭 (2009) 『学びあいが生みだす書く力—大学におけるレポートライティング教育の試み』 丸善プラネット